

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS



岡下誠
表紙之高浜太郎

レオタード風紀委員長
御神楽月見
外伝

麗しの少女は恥辱の躰に啼く

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された『レオタード風紀委員長御神楽月見 外伝 麗しの少女は恥辱の躰に啼く』に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『レオタード風紀委員長 御神楽月見』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



レオタード風紀委員長
御神楽月見
外伝

麗しの少女は恥辱の躰に啼く

岡下誠

表紙／高浜太郎

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

みかぐらつきみ

御神楽月見

レオタード姿に変身して学園の風紀を正す風紀委員長。夏樹の「妹」になったことで淫らな調教を受けることになる。

いじゅういんなつき

伊集院夏樹

校則違反の常習者。伊集院財閥の娘で、敵視していた月見を罠に嵌め、「妹」にする。

たかやまさき

高山咲

風紀委員会所属の一年生。月見とともに校則違反を取り締まっていたが、志麻の「妹」にさせられる。

かわなかしま

川中志麻

夏樹の取り巻き。咲の「姉」。

「乱れた風紀を正しに参りましたわっ」

御神楽月見には三つの顔がある。

一つ目は成績優秀な麗しの女生徒。

二つ目は生真面目な風紀委員長。

そして三つ目は風紀委員会特務執行係。

風紀委員として口頭で注意しただけでは言うことを聞かない生徒には、特務執行係に変身して対処するのだ。

早い話が実力行使である。

肉感的な肢体にピンクのレオタードをまとい、瞳には青いコンタクトレンズを入れ、栗色の長髪をなびかせ、豊満な乳房を弾ませながら校則違反者を取り締まるのだ。

おかげで華聖学園の乱れかけた風紀はずいぶんとよくなったのである。特務執行係への変身は公然の秘密だ。その活動はもちろん非合法だが、乱れた風紀を憂える多くの女生徒たちからは支持されていた。

が、すべては数日前に終わりを告げたのだ。

音楽室での淫らな宴により、風紀委員長としての権威は完全に失墜してしまった……。

朝、校則を遵守した制服の着こなしで月見は登校する。

青いブレザーに純白のブラウス。首には赤いリボンが巻かれている。灰色のスカートはきちんと膝下まで丈があり、足元には清潔な白いソックスを穿いていた。

薄い眼鏡をかけており、彼女の美貌を知的なものに見せている。

教室の前まで来た時、目の前に二人の女生徒が立ちはだかった。

「おはよう、月見」

伊集院夏樹である。

美しい顔立ちではあるが、きつくて高飛車な感じがにじみ出ていた。華奢な身体つき。茶色に染められた髪は明確な校則違反だが、それを気にしている様子はまったくない。

彼女の実家である伊集院家は有力な財閥である。華聖学園への多額の寄付金を背景にして、夏樹は思いのままに振る舞っていた。

気に入らない女生徒を裸に剥くことなど序の口で、ひどい時には取り巻き連中の女生徒にペニスバンドを装着させて輪姦させたりさえもした。

夏樹の意に添わぬたった一人の女生徒が月見であった。名門の御神楽家の令嬢である月見は、風紀委員長として、特務執行係として、手厳しく夏樹を取り締まったのだ。

しかし音楽室での淫虐な陵辱の末、月見はクラスメイトたち全員の前で姉妹の誓いをさせられた。夏樹の『妹』になったのだ。

華聖学園には姉妹制度というものがある。生徒間の伝統として受け継がれてきたのだ。

上級生と下級生とが指輪を交わして個人的な契りを結ぶのである。姉が妹を教え導き、妹は姉に仕えるのだ。

ただし妹は姉へ絶対服従をしなければならない。それゆえに制度の普及率は低かった。月見と夏樹は同級生で、本来は姉妹になれないはずである。だが同じ学年同士で姉妹の契りを結んだ例がないわけではない。誕生日は夏樹の方がわずかに早く、彼女に『姉』の資格があるというわけだ。

もう一人の女生徒は川中志麻。夏樹の取り巻きの筆頭格である。ボブカットの髪を派手な金色に染めていた。身体はむっちりとしていて肉感的。いかにも男好きがする。

「お……お姉さま。おはようございます……」

「私の言いつけ、ちゃんと守ったでしょうね」

「そ、それは……」

昨日の別れ際、ショーツを穿いてくるなど命じられていた。

「確かめるわよ」

スカートの裾をつかまれた。

その手を払いのけたいのは山々だが、姉に対してそのような態度をとることは許されない。月見は両手をかたく握りしめている。

プリーツのスカートが大きくまくり上げられた。

「きゃっ……」

まだ生徒の数は少ないとはいえ、廊下の真ん中でスカートの中身を暴かれたのだ。月見の美麗な顔は恥じらいにぼつと紅潮する。

股間は……純白のショーツに守られていた。つまり姉の言いつけに背いたのである。「どういうことかしら、これは？」

冷やかな口調で夏樹は詰問した。

「申し訳……ありません。お姉さま……」

姉妹の伝統は重々に承知しているが、そのような破廉恥な命令には従いかねたのだ。特に自分独りでいる時、おのれの意志だけで下着を穿かないでいることはできなかった。

「風紀委員長であるあなたが伝統を守らないでどうするの」

「……」

「どんな罰がいい？ 下半身を裸に剥いてあげようか？ それとも下着の代わりに股縄でも穿かせてあげましょうか？」

志麻もにやにやと笑っている。

「全校の男子に輪姦させるっていうのは？」

「ふふふ。それもいいけれど……」

夏樹は淫靡な微笑を絶やさぬまま言った。

「取りあえず今は許してあげる。いずれあなたから、ショーツを脱がせてください、ってお願いすることになるんだから」

不気味な予言を残して夏樹は立ち去る。

かすかな不安を抱いたまま月見は席に着いた。音楽室での一件がまだ記憶に新しいため、級友の女生徒たちはみな月見から目をそらしている。その代わりに、男子生徒たちの淫らかな視線をいやというほど感じた。

誰とも会話しなかったということ以外、午前中の授業は何事もなく過ぎた。

昼休み、月見は尿意をもよおしてトイレへと向かう。しかし入り口には夏樹と志麻が寄りかかっていた。

引き返して別の階のトイレに行こうとしたが、きびすを返そうとした途端に呼び止められる。

「待ちなさい」

「お、お姉さま……」

「トイレに行こうとしてたんでしょ。一緒に入りましょう」

「え……そ、そんな……あつ」

手をとられて強引にトイレの中へと連れ込まれた。二人がかりで個室へと押し込められる。一人でさえ狭苦しい空間に三人も入っているため、身体同士がぎゅうぎゅうに密着し

て窮屈この上ない。

「さあ、遠慮なくしなさい。私たちのことは気にしなくていいから」

「しなさいってまさか……」

「トイレですることと言ったら決まっているでしょ。それとも月見はトイレでオナニーとかするの？」

月見は個室から逃げ出そうとするが、密着状態のどさくさにまぎれて後ろ手に手錠をかけられてしまった。

「ああ……いやっ、お、お姉さま……はずしてくださいっ」

「うふふ。もう逃げられないわよ」

夏樹と志麻がねつとりと絡みついてくる。四本の手が身体中を這いまわった。

ブレザーの胸元に手もぐり込んで、豊かなふくらみをねちねちと揉みしだかれる。乳房の頂にある蕾をつままれ、細かな振動で責め立てられた。

「んはあ……あっ、あん……」

官能美に恵まれた月見の肢体は、望まぬ愛撫を受けてさえ反応してしまう。火照りを覚えるとともに、ブラジャーの中では乳首がぴんと尖っていた。

くびれた腰をさすりまわしていた手は、その下にまで食指を動かす。灰色のプリーツスカートの中に手が這い込んでくる。張りのある尻肉を撫でられ、その割れ目を深くまさぐ

られた。谷間に息づく肛門に指の腹をあてがわれ、ぐりぐりと揉みまわされる。恥辱の排泄器官を刺激されて背徳の快感をかき立てられた。

「おしっこしたかったんでしょ。手伝ってあげるわ」

夏樹の手に股間をとらえられる。ショーツの布地越しに秘められた女肉を愛撫された。ふつくらとした肉の盛り上がりを執拗にこねまわされる。縦に刻まれた割れ目にそって上下になぞられた。

ゆつくりとした指づかいだが、女の性を知り抜いた淫技で確実に性感が高められてしまう。

「お……お姉さま……そこは……んっ、あああっ、あん……」

しびれるような甘いものが子宮からこみ上げてくる。特に、花びらの合わせ目にある小さな蕾をこすられると、膝がわななくほどの快楽を味わわされた。夏樹の指先は、下着の上からにもかかわらず正確に女芯を捕捉している。

下半身に集まった敏感な器官を二つ同時に責め立てられ、こらえきれずに月見は喘ぎ悶えた。

「ほらほら、そんなに声を出すと個室の外にまで聞こえちゃうわよ」

そう言われて嬌声を抑えようとするのだが、我慢できたのはほんの数秒で、すぐにまた唇がほどけて艶めいた声をもらしてしまう。

「ん……くっ……うう……んはあ……ああ……」

よがるまいとして身をこわばらせるが、下半身の奥から突き上げてくる快感に負けて腰をくねらせた。

狭い個室内で下半身をまさぐられる様は、さながら満員電車で痴漢にあっているかのようだ。

女唇から湧き上がる甘美な感覚と、尻穴をくすぐるむずがゆい刺激に触発されて、月見がこらえていた生理欲求までが活発にその存在を主張し始める。

年頃の慎みある娘ならば表立って口にしがたい欲求……。尿意である。

(いやっ、いやあ……もれちゃう……おしっこお……)

手錠でくくられた手をかたく握りしめた。

尿意を気取られまいとするが、ぎゅつとつぶった目や、もじもじとこすり合わせている太腿によって、切迫する生理欲求を見透かされてしまう。

「ほら。おしっこがしたくなってきたんでしょ。ふふふ。してもいいのよ。ショーツを着いたままで……」

「あっ……」

月見もおのれの下半身の有様を改めて認識した。今にも失禁してしまいそうなのに、下着を穿いたままなのだ。もしこのまま粗相をしてしまったら……。

「言つたでしよ。あなたははずれ、ショーツを脱がせてくださいと懇願するつて。さあ、便器をまたぎなさい」

便器の蓋と向かい合う姿勢で、立つたまま便器をまたがされた。大きく広げられた脚は、間に挟まった巨大な陶器が邪魔になつてもう閉じることはできない。下着を穿いた股間の真下には、水を張つた便器が口を開けている。女性版の立ち放尿の姿勢といつたところだろうか。

(い……いや……こんな恥ずかしい格好……)

御神楽家の令嬢はその美貌を恥じらいに紅潮させつつ、懸命になつて下腹部に意識を集めた。陰核と膣口との間にうがたれた小さな穴。おしつこの出口であるその小口を絞り込み、内部の水をせき止めることにすべての努力を傾ける。

だが、午前中を通して溜まり続けてきた尿水は、早く出してくれるようにとせがんでいた。ぱんぱんにふくらんだ膀胱は悲鳴を上げている。内側からの水圧は荒ぶる尿意となつて月見を責めさいなみ、額には脂汗が光っていた。

着衣失禁の恥ずかしさはすでに経験済みだ。もうそのような恥辱を二度と味わいたくないがゆえに、月見はなおのこと尿口をすぼめた。

しかし夏樹と志麻は、おしつこをこらえることだけに集中させてはくれない。上半身では乳房への愛撫と並行して腋の下をくすぐられていた。快感とくすぐつたさとを交互に、

あるいは同時に与えられ、月見の肢体は惑乱の度合いを深めてゆく。

乳房から広がる快感に慣れた頃を見計らって、淫靡な指先は腋の下にもぐり込んできた。普段は滅多なことでは触れられないその肌は、指先のうごめきを敏感に知覚してしまう。なまじブラウス越しなのが、くすぐったさを増した。しかも心の準備をしていなかったで、くすぐりの威力をまともに受けてしまう。

「ひっ、ひゃうっ、ひああああああっ」

黒髪を振り乱し、眼鏡をふり飛ばさんばかりの勢いで身をよじった。

くすぐったさにほんの少し抵抗力ができたかと思うと、いきなり乳首をつままれる。くすぐり責めのおかげで全身が敏感になっており、しこり立った蕾は女芯にも劣らないくらいこの感度になっていた。

「んはああああああっ」

予想をはるかに超えた快楽が、ごく小さな突起ではじける。乳首は喜びにのたうってびくんびくんと脈動し、母乳が吹き出してしまったかと錯覚するほどだった。

下半身でも念の入った責めが繰り広げられている。

志麻は尻の割れ目に深く指先を押し込み、下着の上から尻穴をまさぐっていた。不浄の排泄器官をなぶられる恥辱に腰を前へやれば、そこには夏樹の手が待ち受けている。

やわらかな肉の縦割れに指先を押し当てられ、小さな円を描くように揉みまわされた。

先ほどから淫撫をされ続け、花びらの間からは快樂の証である蜜がもれだしている。ショーツの布地が二重になって濡れている箇所は、すでにじつとりと濡れていた。

「あら、何だかここ、濡れているわよ。もうおしっこをもらしたの？」

女性器への悪戯から逃れようと腰を引けば、志麻の手に尻穴を差し出す結果となる。進退窮まって腰を止めれば前後から容赦なく淫弄された。

「あああ……ん……はあ……はああん……」

二つの女体に挟まれて月見は身悶えする。

眼鏡をかけた清楚な美少女は、二人の少女に絡みつかれて肢体をくねらせていた。

下半身の前後から襲いくる性感や、腋の下から広がるくすぐったさが、なおのこと尿意をこらえ難いものにする。

しかも、姫唇をなぶる指先が描く楕円は徐々に収斂し、一点へと絞り込まれた。尿道口や陰核がある付近へ、集中的に微振動をあげせられる。

「お、お姉さまっ、おねえさまああああ」

むずむずとした快感に尿口を貫かれ、たまらずに月見はのけぞった。指先の振動で膀胱内の水までが細かにふるえたかのようにだ。

「何かしら？」

月見のせっぱ詰まった表情を夏樹は楽しげに見物している。

「ど………どうか………」

ショーツを脱がせてくれるように頼むのは口惜しいが、着衣失禁という痴態はすぐそこ
にまで迫っていた。夏樹と志麻の指先は、屈服の言葉をうながすかのように恥器官を翻弄
する。そのうごめきは執拗かつ淫靡で、性に目覚めていない童女でさえもよがり狂わせる
ほどのものだった。ましてそれを受けているのは年頃の乙女……。

月見の肢体は芯まで発情させられていた。全身は微熱を帯び、半開きになったまま閉じ
ることを忘れた唇からは途絶えることなく喘ぎがもれる。女体にある三つの尖り、乳首と
陰核は、はしたないまでにぴんとしこり立ち、どんな小さな刺激をもむさぼろうとしていた。
性的興奮は限界近くまで膨れ上がり、あと少しでも快楽を与えられれば風船が破裂する
かのようにすべてがはじけてしまうだろう。

御神楽家の令嬢としての矜持をふり捨て、トイレの天井に向けて叫んだ。

「どうか月見の……月見のショーツを脱がせてくださいっ」

屈従の言葉を放ったその瞬間、月見の中で何かがうたかたのように消えた。それは令嬢
としての誇りか、あるいは乙女の慎みか。

いずれにせよ、恥ずかしい言葉を吐いたことが、自分でも妖しむほどに快感なのだ。細
波のような愉悦に身体がふるえる。

そこに股間と尻への責めが重なった。尻穴のすぼまりをえぐられ、女芯と尿口をともに

タシーではなく、徐々にこみ上げてくる類のものであったが、喜びの持続時間は長く、身体の芯まで快感が刻み込まれる。

尿水はショーツからしみ出し、股間から真下に落下して水音を立てた。立ったままの放尿。女の子としてはありえないその姿勢が倒錯的な快感をかもし出し、月見の絶頂に彩りを添える。

むっちりとした太腿をわななかせつつ、麗しの少女は放尿の快感におぼれていた。

月見は絶頂の余韻に浸りながら、おのれの痴態に恥じ入っている。立ったまま着衣失禁し、あまつさえ気をやってしまったのだ。

しかし心ではどんなに恥じらっても、肉体は女の喜びに酔いしれている。

快感のあまり太腿には力が入らず、今にも崩れ落ちてしまいそうだ。端正で高貴な顔はほんのりと上気し、瞳は愉悅に潤んでかすみがかかったよう。みずみずしい唇はしどけなくゆるんでいた。

「ふふふ……せつかくおねだりの言葉を言えたのに、間に合わなかったようね」

あざけりのこもったささやきに耳元をくすぐられる。背後では志麻が笑い転がっていた。

プリーツスカートの中に穿いている下着は、クロッチの部分がぐっしりと濡れている。恥辱の水をたっぷりと含んだ布は女の子の秘められた肌にびったりと張りついていた。濡

れた下着は早くも体温で蒸れ始め、愛液と尿水とが入り混じったものが濃厚な臭気となつて立ち上りだしている。

（あ……なんと………においかしら……）

このような生々しい匂いを自分の股間が発しているなど信じたくなかつた。ましてやそれを夏樹や志麻にかがれているかと思うと、顔がカツと熱くなる。

「このまま濡れ濡れパンツティーを穿いて授業を受けたい？ それとも脱がして欲しい？」
尿の雫がしたたるショーツなど、これ以上は一秒とて穿いていたくはなかつたが、両手は手錠で拘束されていた。

「ぬ……脱がせてください。お姉さま……」

隷従の言葉の代償として、ようやく下着を脱がせてくれた。おしっこに濡れた股間を外気に撫でられる。心地よさとともに、恥じらいの器官を剥き出しにされたことを実感した。月見の股間に食い込んでいた下着を夏樹はもてあそんでいる。ショーツを裏返しにして、女性器があたっていた箇所を鼻を近づけた。

「あ、いやっ……嗅がないでくださいっ」

「くくく……すごい匂いだわ。おしっこマン汁がブレンドされて。どんなに美しいお嬢様でも、おま○こはくさいということかしら」

麗しの風紀委員長は羞恥に顔を赤らめる。

「ところで月見、何か私に言うことはないかしら？」

「ぬ……脱がせてくださり、ありがとうございます。お姉さま……」

夏樹は鷹揚にうなずいた。

「あなたにはお仕置きをしないとね。姉である私の言いつけに逆らったんですもの」
おしっこを含んだショーツを口元に突きつけられる。

「これを口にくわえなさい」

「え……そんな……」

「あなたのパンティーだし、あなたがもらしたおしっこでしょ。罰としてくわえなさい。
それとも、下半身裸で校内を引きまわされたいかしら」

染みのついた白い布きれを唇の間に押し込まれる。

「落としたり、おま○こ丸出しで引きずりまわすわよ。それとも、もつと恥ずかしい刑に
してあげましょうか」

そう脅されて、月見はあわててショーツをくわえ直した。尿の匂いが鼻をつく。

「そう。いい娘ね。そのままでもいいなさい」

便器をまたいで直立。灰色のプリーツスカートを前も後ろもまくり上げられて裾をウエストに押し込まれた。スカートという幕を上げられて、秘められた器官が夏樹たちの視線にさらされる。

花園に茂った陰毛は太く縮れており、女性器の上部をこんもりと覆っていた。陰門はやわらかそうな盛り上がりを見せ、その合わせ目からは薄桃色の花びらがのぞいている。肉厚の姫花びらはわずかながら左右にめくれ返り、肉塊を求めて咲きほころんでいるかのような。しかもそこは、尿だけではなく濁った粘液によっても潤んでいる。

二枚の花弁が合わさったその上端には、乙女の身体の中でも最も感じやすい蕾が息づいていた。小さな身体をぷつくりとふくらませ、包皮からちよこんと顔をのぞかせている。「すてきよ、月見のおま○こ。姉としては、全校のみんなに見せてあげたいんだけど、どう？」

にやにやと笑いながら夏樹が顔を近づけてくる。月見は、濡れて重いショーツをくわえたまま、あわててかぶりをふった。

「そう？ 残念ね。こんなにおいしそうなのに」

しなやかな手が秘唇に伸びてくる。ほころんでいる姫花びらの間に、中指の腹をつぶつとめこまれた。

「んっ……」

思わず腰が跳ねる。

気をやってほどよく高ぶっている身体は、わずかな刺激に対しても鋭敏に反応した。股間に刻まれた唇は、姉の指先に左右から絡みつき、ひくひくと吸いつく。まるでもつ

と深いところでくわえ込みたいと言わんばかりに、陰門の内側にある秘められた粘膜に他人の指先を感じ、ほの甘い快樂が香り立つ。

二枚の肉花びらの間を細かな上下動で愛撫された。女芯、尿口、膣穴……と、女の弱点が三つも集まっている箇所を徹底的にこすられる。

恥粘膜をこすり立てられて、性的快樂が美しい火花を散らした。

膣の入り口を揉みまわされると、奥からとろとろと蜜がもれでてしまう。射尿の快感からさめやらぬ尿口をつつかれると、むずむずとしたくすぐったい喜びにさいなまれた。

そして過敏な女芯を揉み転がされると、きらめくような純粹な快樂を味わわれる。転がされているうちに陰核包皮は完全に剥けてしまい、感じやすい肉突起が無防備にさらけ出された。そこを摩擦されると痛いほどの鋭い快感が炸裂して、月見は長く美しい黒髪を振り乱す。

シヨーツを隔てての愛撫とは異なり、剥き身の秘唇への直接的な責めは激しい快樂の炎となつて燃えさかった。

「んっ……んうう……んっ、ん……」

シヨーツを口にくわえているため、月見は呻くことしかできない。

(こ……声が……もれてしまいますわ……)

ここにいたって月見はようやく気づいた。

これも罰の一環なのだ。

ひとたび発情した女体はまだまだ性的興奮のただ中において、ささいな愛撫に対しても、はしたないまでに大げさな身悶えをしてしまう。少しでも気をゆるめれば、高らかなよがり声を放つてしまいそうだ。

もし口にくわえている下着を落とせば、秘唇をさらけ出しての校内引きまわしである。あるいはさらに恥辱に満ちた私刑か。

(そ……そんなの……いやですわ。絶対に声を出すものですかっ)

月見の悲壮な決意をあざけるかのように、夏樹の指はいっそうの淫靡さで女唇を責め立てる。

剥き身の女芯をつままれて、その付け根からほじくり返された。根本から揉み転がされる。(ひ……あひっ、あんっ……。そ、そんなに引っ張られたら……取れて……しまいますわ……)

過敏な肉粒は手荒な愛撫にびくんびくんと脈打った。同じ女性である夏樹は絶妙の加減で陰核を締め上げる。小さな突起から膨大な快楽が流れ込んできて、眼鏡をかけた清楚な風紀委員長はその肢体をよじって淫らに悶えた。

「ふふふ……。さすがは風紀委員長。そう簡単には啼かないわね。だったらこうしてあげる」
夏樹のもう片方の手は膣穴をねらっている。愛液でどろどろになっている秘口に指先を

突き入れられた。第一関節までのごく浅い挿入にもかかわらず、女肉隘路は喜びのあまりに甘いうごめきで侵入者をもてなす。ひとりでに収縮して指先に吸いつき、もつと奥に引っ張り込もうとした。

しかし夏樹はそこまでしか指をくれない。入り口付近で抜き差ししたり、かきまわしたりするだけである。陰核への愛撫にくらべてじれつたく、むやみにうずきばかりがかき立てられた。

(もつと……もつとお……)

瞳に媚情を込めて姉を見つめる。膣口は物欲しそうにヒクヒクとすぼまり、はしたなく愛液の涎を垂らした。

(ああ……でも、そうしたら声をこらえきれませんわ。でも、でも……じれつたいんですの……)

強烈な快楽と、弱火で煮込むような愉悦が二ヶ所から同時に送り込まれる。

美しき不良少女の手管にかかって、月見の性感は高まっていった。夏樹の指が活発にうごめけば快楽をあおり立てられ、じらしにかかれば女肉のうずきに悶々とする。

何人もの女生徒をなぶり抜いてきた夏樹は、熟練の淫技で快楽とじらしとを交互に与えた。官能値の曲線は乱高下を繰り返し、しかし決して絶頂には届かない。こうして獲物を快楽づけにしてゆくのだ。

「んっ……うう……んうう……んん……」

赤い唇に自らの失禁ショーツをくわえたまま、美しき風紀委員長は鼻にかかった呻きをもらした。

夏樹一人からの淫戯でさえ月見には耐えきれなかったであろう。それにくわえて志麻までが責めにくわわってきた。

「あたしの得意技、たっぷりくらいな」

左手で尻肉の片方をつかまれ、いっぱい割り広げられる。便器をまたいで立っていたため尻肉は開きぎみになっていたが、志麻の手で肛門までもあらわにさせられた。

「んっ……」

眼鏡をかけた月見の目元が赤らむ。

そこを暴かれることは、年頃の少女にとって、ある意味では女性器を見られるよりも恥ずかしく屈辱的である。

思わず振り向くと、金色の髪をした不良少女が意地悪げな笑みを浮かべていた。右手にこよりを持っている。トイレットペーパーをよじってつくったものだ。

「これで可愛がつてやると、咲は尻を揺すって喜ぶんだよ。一度なんかおもらしちゃったこともあるし」

(な……なんですって……咲が……)

咲は、月見の最愛の少女である。風紀委員特務執行係として二人で活動し、華聖学園の風紀秩序を正してきたのだ。月見は咲を『妹』にと心ひそかに思っていたが、その機会は永遠に失われてしまった。咲は志麻の『妹』になつてしまったのである。

「こうするかね……」

こよりの先で尻穴のすぼまりをくすぐられた。アリが這いまわっているかのようにくすぐったさを味わわされる。

（んんん……くすぐったいつ、やつ……だめええ……くすぐったいんですのおつ）

月見が左右に身をよじると、青いブレザーの内側では豊満な乳房がゆさゆさと揺れる。不浄の排泄器官を襲うくすぐったさはあまりにも激しく、どうにも我慢ができないくらいのものであった。腰は跳ね、尻肉がぶるぶると痙攣する。

「んっ……うううう……んっ、んんっ」

前門にほどこされる手の込んだ愛撫。

後門になされるくすぐり責め。

二人がかりの淫戯に翻弄されて、麗しの風紀委員長はよがり悶える。後ろ手に拘束された身体をよじり、下半身にわだかまる快楽を少しでも発散させようとした。

だが、歓喜の声を上げられないだけに、性感はじわじわと少女の肉体に蓄積されてゆく。肉感的な肢体は女の喜びに染め上げられた。夏樹と志麻が目配せをしたことに気づかない

ほどに。

「そろそろとどめをさしてあげるわ」

膣穴と肛門。一気に指を突き上げられた。

「んううっ」

散々にじらされ、くすぐられてきた穴に指を打ち込まれて、月見は背をのけぞらせる。二つの恥器官から快楽が噴き上げた。秘めやかな孔はきゅんきゅんと収縮して同性の指を歓迎する。

「ほらほら、気をやっちゃいなさい」

夏樹と志麻は交互に指を突き上げた。秘唇と尻孔とをかわるがわるにえぐり抜かれる。

「んっ、んっ、んうっ、んううっ」

突き上げのリズムに合わせてうめき声を搾り取られた。前と後ろの穴で二つの指がせめぎ合い、荒々しく官能をかき立てられる。

身体にため込んでおけないほどにまで性感は膨れ上がり、限界を超えた瞬間に激しくはじけた。

「ひあああああああああああつ」

高らかな歓喜の叫びが女子トイレに響く。

くわえていたショーツは舞い落ちた。

快感に打ちのめされて全身から力が失われる。もはや立っていることもできず、糸が切れた人形のように崩れ落ちた。大きく美脚を開いたまま便座の上に直接またがってしまう。意識がもうろうとして、ふわふわと漂っているかのようだ。目の前には、おしっこをつぷりと含んだ下着が便器の蓋に引っかかりかかっている。

それは失禁の証であり、氣をやってしまった証でもあり、月見は頬を赤らめて目をそらした。

「落としたわね」

頭上から夏樹の冷やややかな声がふってきた。彼女の高飛車そうな美貌には粘りつくような笑みが浮かんでいる。

月見は恥ずかしさとくやしさに顔を背けてトイレの床を見つめた。自らの小水に濡れた下着をくわえさせられ、あまつさえ前後から股ぐらをなぶられて望まぬアクメに追いやられてしまったのだ。

「月見ったら本当にふしだらね。おしっこはおもらしするし、ちよつと可愛がつてあげただけでも氣をやるんですもの」

「そ……それは……お、お姉さまが……」

「まったく、姉として恥ずかしいわ」

麗しの風紀委員長はうつむいて頬を染める。

「お仕置きは……下半身丸裸で校内引きまわしだったかしら」

「それだけのご容赦を……お姉さま。そんなことをされたら、明日から学校に来られませんか」

夏樹は笑みをたたえたまま右手を月見の口元に突きつけた。

「あなたのオマ○コ汁で汚れてしまったわ」

一瞬だけ顔をしかめたが、月見は、自分の愛液にまみれた指に口づけした。しゃぶりついで清める。

「どう？ 自分のオマ○コ汁の味は？ 匂いは？」

羞恥の微熱に冒されつつ、目を伏せて奉仕にふけた。ちゆくちゆくという唾液音をさせながら。

「あたしのもやって」

志麻までが指を口に押しつけてくる。志麻の指がもぐり込んでいた場所は肛門。膣分泌液よりもはるかに屈辱的なものを舐めしゃぶらされた。

下半身裸で校内を引きまわされるのを許してもらうためとはいえ、年頃の乙女にとって、いや、まともな女性にとっては耐え難い恥辱である。恥ずかしさのあまり、意識が煮えたぎったかとさえ思った。

「そうね。特別に校内引きまわしは勘弁してあげるわ。その代わり……」

おしつこに濡れたショーツを口の中に押し込まれた。くわえさせるといふような生やさしいものではなく、口を上下にこじ開けられ、下着を丸ごと押し込まれたのだ。

その上からハンカチで猿ぐつわをかまされる。

「ふふふ……ハンカチは私からの贈り物よ。こうすれば下着を吐き出せないでしょ」

「んううううっ」

おのれの尿水の味が口いっぱいに広がった。恥辱の塩味である。

しかし淫惨な私刑はそれだけにとどまらない。

用を足す姿勢で便器に座らせられ、脚を大きく開かされた。スカートはまくり上げられてウエスト部分に巻き込まれているので、股間は隠しようもなくあらわになってしまう。

その恥ずかしい開脚姿勢のまま、足首を便器の基部に縛りつけられる。便座なしで便器へ直に腰かけさせられたため、太腿の裏に陶器の冷たさを感じた。立ち上がれないように腰にも縄をかけられる。

「人間便器のできあがり」

夏樹は嗜虐に満ちた表情で、淫猥な女肉オブジェを見下ろした。

「こうやって使うのよ」

不良美少女はスカートのおのれの中に手を入れて下着を脱ぎ下ろし、足首から抜く。ス

カートをまくり上げて恥ずかしげもなく秘唇をあらわにした。妹を淫弄して興奮したためか、そこはぬつとりと蜜に潤んでいる。

大股を開いて、相對の姿勢で月見の腰にまたがった。月見の脚に座ったのである。

互いの息吹が感じられるほどの近さで姉妹は向かい合っていた。顔も、胸のふくらみも、剥き出しになった股間も。妹の陰毛が姉の秘唇をくすぐっている。二人とも大きく股を広げているので、女肉花は内部の秘粘膜もあらわに咲きほころんでいた。

「いい座り心地……」

猿ぐつわをかまされた下唇をれろんと舐め上げられる。

「さつきからオシッコしたかったの。私のオシッコ、たつぷりと味わいなさい」

夏樹は熱い吐息をもらす。とともに妖美に咲く淫桃花から小水をほとばしらせた。

ぷしゅしゅゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ……。

「んっ、んんんっ、んっ、んううっ」

月見は眼鏡をかけた清楚な顔を左右にふりたくる。黒髪も、ほのかな香りをまきながら揺れ舞う。

(いや……こんなのって……ひどすぎますわ……)

想像すらしたこのとないははかしめを与えられ、麗しの風紀委員長は呻いた。だが呻けば呻くほど、口内に押し込められたショーツからは自身の尿がしみ出てくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>